



進修同窓会HPにアクセス



平安神宮 中37回 1937[昭和12]年(左上は大極殿)

土浦中学校の修学旅行 11 中学30回生の関西旅行 5

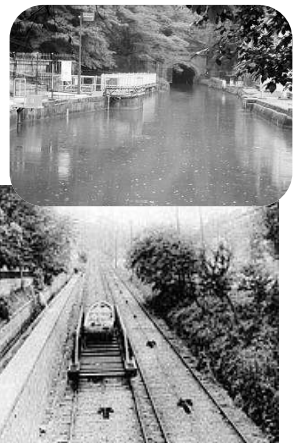
1930[昭和5]年6月1日から8日に掛けて実施された土浦中学30回生の関西旅行。今号では、京都市内を歩いた、6日目午前の行程を『進修第32号』『関西旅行記』と『中三十回卒業五十周年記念誌』中30回松井喜一郎「旅行記余聞」とで辿っていきます。引用文中の旧字体は、「龍」を除き、新字体に改めました。なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

第六日(6月6日)午前 五年 橋爪信常

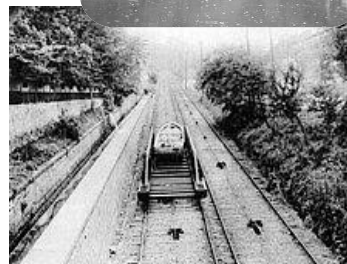
「四方の寺より響き出る鐘の音に何時か夢は破られて居た。涌いては漂ふ静穩の響と共に京の民家の戸は声なく明い【開い】た。次第に消え行く電車の響近く自動車の音も大阪とは違つて何となくしつとりと落ち着いて居る。今や亀城の健児は、数日の疲れにすやすやと寝入つて居る。旅行のはじめ三時に起きた者が、四時、五時と次第におくれ、今は宿屋の者に、蒲団を剥ぎ取られるまで知らずに寝て居る様になつたのである。顔を洗ひ三階の窓に寄りかゝれば、一面霧【もや】に包まれた京都市より、諸神社仏閣の三角形の屋根が此処彼処に浮かび上がり、おぼろに霞む東山の背には、金を流したかの如く雲が棚引いて京都の夜は徐徐に明けて行く。折から勇ましき五時半のサイレンが各工場百貨店の屋上より響き渡り、朝日は軟かに【やかに】窓に注いだ。

六時半には朝食をすませ七時には伏見屋を出発し、之より【今宵の宿】いろは館に荷物を扱け【「預け」の誤植】て東に向つた。幾つかの電車線を越えれば有名な【蹴上】インクライン^(註1)軌道に達する。長さ三百二十間、勾配十五分の一と言ひ、その幅は普通の鉄道線路の二倍もあらうかと思はれる。舟の悠々と之を上下する光景は他の地では見られぬ所、之と並んで有名なのは【琵琶湖】疏水運河^(註2)で琵琶湖の水を流して京都に導き、交通運輸の便を図り、且つその水力を工業の原動力に供して居る。

インクライン軌道に沿うて下れば動物園を正面に望み得る。軌道の水に入る辺より左して、青柳の運河にいただける間



疏水運河



インクライン

(琵琶湖疏水)

二三町ばかり、右折して此の運河を渡れば岡崎公園である。右には動物園、左にはグラウンドのある松並木の間を通り過ぎて、官幣大社平安神宮に参拝する。本殿は中央最北に位し、破風造り、檜皮葺にして四方に透塀【すきべい】を繞らして居る。其の南の大極殿は往古の京都大極殿を模したるものであつて丹【に朱】濃いあか色の柱、碧瓦の屋根は古の京の都の華さを其儘物語つてゐる。左右に歩廊長く通じ、其の終端に各一個の同形同大の高樓を備へ、京【東】の誤植【を蒼龍、西を白虎と言ふとの事である。大極殿の前に龍尾壇、壇の前に応天門が天をついてゐる。桜樹の中を過ぎ隣の武徳殿に來れば石廊を繞らした古風の建築である。

之を出でてしばらく西に向ふとどぶ臭い賀茂川にさしかゝつた。之を渡れば左方に淡黄色煉瓦造りの洋館東【「京」の誤植】都中央電話局がある。街路樹美しき中を歩く事数町にして右し、緑の芝生の中に幅約三十間の小石を敷きつめた美しき道を見出した。之即ち御所にして緑樹の間に見えかくれする紫宸殿の屋根には数本の避雷針さへ立てゝある。愈々建礼門に來た。

檜皮の屋根は苔むしては居るが古の皇居の跡其の儘を見る事が出来、一同此処にて礼拝したのである。

門のすぐ右は彼の有名な蛤御門で、長州と会津との激戦^(註3)の際、高杉晋作等の蛤御門を出れば直ぐ左に別格官幣大社護王神社がある。古の忠臣忠烈を深く感じ一同うやうやしくぬかづき、之より市内電車にて北野に向つた。

官幣中社北野神社は停留場前にあり、梅多くして、菅原道真を祀つたものである。名高き日月三光の門を抜ければ左右には幾つかの牛の石像が並んで居る。北野天満宮の裏を流れる紙屋川に架せる桜橋を渡れば、正面は官幣大社平野神社である。此の紙屋川の畔には昔、紙屋院と云ふものがあり、紙をすき朝廷の用に供へたと言ふ事である。

民家の立ち並ぶ坂路を行く事七八町にして左せば、眼界は打ち広げた田園となり。之より二三町にして車馬通行と記せる黒門を過ぎれば左右に松柏、紅葉鬱鬱たる別天地がある。之即ち金閣寺の庭園であつて、名木櫟【いちい】は幾百年を過したものであらうか、入口の左手に蔽ひかぶさつて居る。本堂内は雲慶【運慶】狩野氏等の大家の作に満されて居り、陸舟の松の一枝枯れたのには誰も惜まざる者は無かつた。所謂金閣寺は蓮の鏡湖池に臨み、中に雲慶の作、阿弥陀、観音、勢至三尊を安置し池には葦原島、赤松石、鶴亀島等を浮べて居る。義満の飲んだと言ふ銀河泉、又手を洗つたと言ふ最も幽邃を極めて居る。右方の丘上には夕佳亭【せつかいてい】と名づくるものがあ

り、其の南天の床柱、萩の違ひ棚は有名なものである。

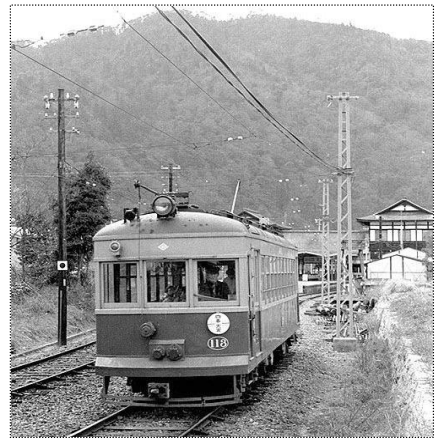
金閣寺を出で、紙屋川に沿つて下り、

【嵐山電鉄北野線、現京福電気鉄道北野線】北野駅に達した。駅の前は木々繁り合ひあぶら蟬は絶え間なく鳴いて暑さをさそふ様に、又、涼気を覚えさせる様である。電車は北野を後にして嵐山に向つた。

北野より二つ目の停留場等持院駅の北方一町には等持院があり、此処には足利尊氏の墓があつて、嘗て【江戸中期の尊王論者】高山彦九郎が土を投げつけたと言ふ話が残つて居る。此の後方に丸い椀を伏せた様な衣笠山が見えて居る。やがて、妙心寺駅に着けば駅の南に当たり【多くの塔頭が建ち並んでいるので】全国の寺院を萃め【あつめ】たとも言はれる臨済宗妙心寺派本山妙心寺が木の間のぞき、其の後方三丘相連れる双ヶ岡【双ヶ丘ならびがおか】は兼好法師の徒然草を草せし処、もと公園であつたと言ふ。次の御室駅に來れば緑樹の中、赤き仁和寺山門が目前に現はれ古画其のまゝの美観を呈して居る。光孝天皇の御陵は仁和寺の西に、宇多天皇御陵は北辺にある。しばらくにして帷子辻【かたびらのつじ】に着いた。もとは北野より此の駅のやゝ東、太子前まで徒歩で修学旅行をやつたものだと言はれた。なほ電車は史蹟美と風景美とを併せ尽くせる嵯峨野の南縁を走り続けるのであつた。嵐山鉄道沿線一帯は活動写真撮影地として誰しも知る有名な処であり、其の終点目的の嵐山駅に下車すればあたりは既に幽邃の氣に満ち満ちて居る。之が撮影の好適地なる所以であらうか。

保津川に架せられた渡月橋はよく絵葉書等に見る処、之を渡り中島公園に至

り、我等は初めて解散する事が出来た。



嵐山電鉄嵐山本線 後方は嵐山駅

別れる【分かれる】より早く誰も彼も『ヤー、ロケーション、ロケーション』と口口に飛んで行くのか消えて行くのか分からぬ様である。時に午前十一時。撮影が終ると一同中島公園のベンチに腰を卸し【降ろし】、保津川の清流を眺めつゝ

昼の食に取りかゝつた。中島公園は川に浮く小島である。保津川は上流を丹波に発し、大堰川と言ひ、下流は、桂川となつて淀川に注ぐ名流である。京都を見物して、保津川下りをなさずば、真に京都を見物したるものと云ふべからずとまで称せられて居る。後嵯峨天皇、龜山天皇の御陵が北方近く見られ、幾重にも連る京都の山は嵐山と其の美を競はんとする如く見えるが何れも嵐山の山紫水明に肩を比すべきものは無い。弁当は伏見屋製のものにして、蒟蒻三切れ、蒲鉾二切れ、牛蒡一つ、川魚二尾、えび、生薑【生姜】等の七いろのおかず、嵐山より吹き下す清風は面を撫で、唯恍惚と、時の移るのも忘れるばかりであつた。ポート貸場を過ぎ川沿ひに上れば、川愈々清く山益益緑にして人の目を一刻も惹かざる事のない仙境である。千鳥が

淵に至れば道は急に傾斜の度を加へ、足下の河水は唯一枚の青硝子の如く下る小舟は長く長く銀の尾を引いてゐる。山かと思れば河、川かと目を凝らせば彼岸の草、春は桜、秋は紅葉の嵐山、今は全山緑に染まり、余る緑を川に投げ、道に投げて我等の目を喜ばせて居る。折から対岸の山林か、下る小舟の中よりか、清らかに漂ひ出る銀笛【ぎんてき】の音は、余音嫋嫋【じょうじょう】 音声が細く長く続いて絶えないさま】として河面に流れ一段の趣を添へてゐる。……。」

松井は「旅行記余聞」で、

「……。さて第六日の京都の部は橋爪信常君、失礼ながら、橋爪君にこれほどの文才があつたのかと驚くばかりの本格的紀行文である。このままそっくり教科書に載せたいほどの名文である。……。」と賞賛してゐます。更に、
「……。文中いたる所に示す数字の正確さ。……あたりに、君が後に文科に進まず、理科を選んで医師になる素地が窺われる。君の文章はただ科学的に過ぎず、理屈っぽく、冷たいというのではなく、文章の山場にかかると例えれば嵐山で保津川に遊ぶあたり、『山かと思れば河、川かと目を凝らせば彼岸の草、春は桜、秋は紅葉の嵐山、今は全山緑に染まり、余る緑を川に投げ、道に投げて我等の目を喜ばせて居る。折から対岸の山林か、下る小舟の中よりか、清らかに漂ひ出る銀笛の音は、余音嫋嫋として河面に流れ一段の趣を添へてゐる。……。』といった文学的な名調子になつてくる。
その上、まことに具体的で、嵯峨の風景に恍惚となつていても、膝の上に開く弁当は『伏見屋製のものにして、蒟蒻三

切れ、蒲鉾二切れ、牛蒡一つ、川魚二尾、えび、生姜等の七いろのおかず」と心惜いばかりである。……。」
数日來の疲れに加え、東山から金閣寺までの行軍では、見学どころではなかつたでしょうが、橋爪は、見学地のポイントをきちんと押さえており、さすが土中生です。自由行動となつた嵐山では、映画のロケが行われていたこともあり、生徒たちは元氣を取り戻したようですが、先生方はどうであつたのでしょうか。

インクライン（Incline）斜面・勾配の意

傾斜面にレールを敷き、動力で台車を動かして船・貨物を運ぶ装置。蹴上インクラインは、蹴上船溜り（船溜り）と現在の琵琶湖疏水記念館前の南禅寺船溜り（船溜り）とを結ぶ、延長640m、敷地幅22m、勾配15分の1の路線で、1891（明治24）年から1948（昭和23）年まで実用に供され、巻き上げ機は蹴上発電所の電力で運転された。所要時間は10分から15分、約36mの高差を克服するために、船を台車に載せ、ケーブルカーと同じ原理で運んだ。インクラインによって、船は貨物の積み下ろしをせず、高低差を乗り切ることができた。
現在では、国の史跡として整備され、レールが形態保存されている。インクラインの中を自由に歩くことができて、桜並木の観光スポットになつてゐる。
〔注2〕疏水運河（琵琶湖疏水）
琵琶湖から京都市内へ通じる水路で、水運、発電、上水道、灌漑を目的として造られた。滋賀県大津市三保ヶ崎から京都市左京区蹴上までの第一疏水（1890（明治23）年完成、長さ8.7km）と第二疏水（1912（大正元）年完成、長さ7.4km）とから成る。琵琶湖疏水を利用した、日本初の一般供給用水力発電所「蹴上発電所」は、1891年初に運転を開始した。1895（明治28）年には、この電力によって日本最初の市電が走り、西陣ほか市内の工場に役立ってきた。琵琶湖疏水事業は京都市の近代化に大きく貢献した。蹴上浄水場は、現在の京都市の多目的な機能が薄れ、蹴上浄水場への供給が主たる目的となつてゐる。
〔注3〕長州と会津との激戦
禁門の変、または蛤御門の変。長州藩が、「八月十八日の政変」で失つた勢力を回復するために、1841（元治元年）、池田屋事件を契機に京都に出兵し、会津・薩摩などの藩兵と蛤御門付近で戦つた。敗れた事件。これを機に、江戸幕府の第一次長州征伐が行われた。高杉晋作は、脱藩の罪で謹慎処分中であり、長州軍に参加して、高杉晋作と並び松平下村塾の双壁であつた久坂玄瑞らが、自決或いは戦死した。
（高21回 松井泰寿）